

# 兵庫県篠山市の農業集落における丹波黒の生産体制

小林 基<sup>†</sup>

## Production Districts of A Native Variety of Black Soybean “*Tambaguro*” in Sasayama, Hyogo

KOBAYASHI Hajime

### Abstract

We aim to clarify the reasoning behind farmers and communities farming *tambaguro* which is a native soybean variety, in Sasayama, Hyogo Prefecture. Data were collated from interviews and postal surveys. *Tambaguro* is a substitute crop to rice production. Producing *tambaguro* is potentially profitable although its cultivation is labor intensive as the production process has not been mechanized. However, many farmers had no choice but to grow *tambaguro* due to the rice production adjustment. Conversely, many farmers planted *tambaguro* for their personal consumption or as a gift because of its superior flavor. Therefore, native variety conservation must be managed with a broad perspective that incorporates various social and cultural conditions.

### 要 旨

本稿は、兵庫県篠山市における大豆の在来品種・丹波黒の生産が、農家および農業集落レベルでどのように行われているのかについて、現地調査および郵送調査で明らかにすることを試みた。丹波黒は水田転作作物に位置づけられ、一定の収益が見込めるものの、機

---

<sup>†</sup> 大阪産業大学 デザイン工学部 環境理工学科 非常勤講師 (摂南大学 外国語学部 特任講師)

草 稿 提 出 日 2月28日

最 終 原 稿 提 出 日 3月27日

械化されていない作業が多く労力がかかる。アンケートでは、収益性の高さのほか、減反対応を理由に栽培を続ける農家が目立ったが、食味の良さから自給用や贈答用に作付しているという理由も見られた。在来品種の生産存続の条件は、経済性のみならず、文化的・社会的に埋め込まれた農産物として、より広範な観点から検討する必要があることが確認できた。

Keywords: Local varieties, *tambaguro*, soybean, community farming, Sasayama, Hyogo  
キーワード：在来品種，丹波黒，大豆，集落営農，兵庫県篠山市

## 1. 本稿の目的

1990年代以降，農作物の在来品種・系統が注目されている。その背景としては，全国的に農業従事者が減少する中で，各地域におけるブランド農産物振興が重要視されたこと，作物の遺伝的多様性を保全することの重要性が世界的に認識されるようになったことなどが挙げられるだろう。農作物の在来品種の保全や生産振興については，様々な論考が登場している（西川 2004；香坂・富吉 2015；江頭 2016など）。これらの研究は，在来品種を在地で栽培・管理し存続させてゆくための方策について総合的に検討したものである。

上記の諸研究も含め，一般に在来品種は扱いが難しく，現代的な農産物の生産・流通システムに乗せにくいことが指摘されてきた（高橋 2002；タキイ種苗出版部編 2002）。在来品種の生産が衰退しているそもそもの理由が，近代育種によって登場した新品種に比して生産・流通効率が悪いせいであることを考えてみれば，当然のことである。しかしながら，例えば京野菜や加賀野菜のように，様々な困難を抱えつつも商品化・ブランド化されている在来品種もあり，現代的なフード・システムの中で在来品種を存続させてゆくための方策や条件を検討することも重要なのではないかと筆者は考えてきた。

筆者は，兵庫県・篠山盆地を中心に栽培されてきた大豆の在来系統である丹波黒に注目し，その事例をもとに「伝統作物」の産地化と消費拡大の発展図式を提示することを試みた（小林 2016）。ここでは，転作による規模拡大とマスメディアを通じた加工品の認知度向上が丹波黒の広域ブランド化を実現させたことを論じた。しかしながら，差別化とブランディングを進める中で農家へのプレッシャーが生じていることも同時に明らかになった。

一方，この論文の中で，筆者は農家や集落といったミクロなスケール／レベルの条件について触れることがほとんどできていなかった。本稿では，上記の論文のための調査を行った当時（2015年）に集めた資料をあらためて整理し，現地の農家や集落がどのような

条件の下で丹波黒の生産を続けているのかを詳細に明らかにしたい。これにより、産地として単にブランドとしての知名度を高め生産規模や市場を拡大するだけでなく、より多面的に在来品種の存続をマネジメントするうえで必要な視点を得られるはずである。

## 2. 研究対象

### (1) 篠山市について

本題に入る前に、本稿の対象地域である兵庫県篠山市<sup>1)</sup>について述べておきたい。2014年9月現在の総人口は43,421人、総面積は約377.61km<sup>2</sup>、人口密度は約115人/km<sup>2</sup>である。当該地域は中国山地の北東縁部を占める丹波高地の中西部にあたる篠山盆地に位置しており、近世には篠山城下町を中心とする篠山藩が置かれていた。明治期以後、旧藩の領域は複数の自治体に分割されたが、多紀郡という一つの郡をなし、1999年に群を構成する四つ

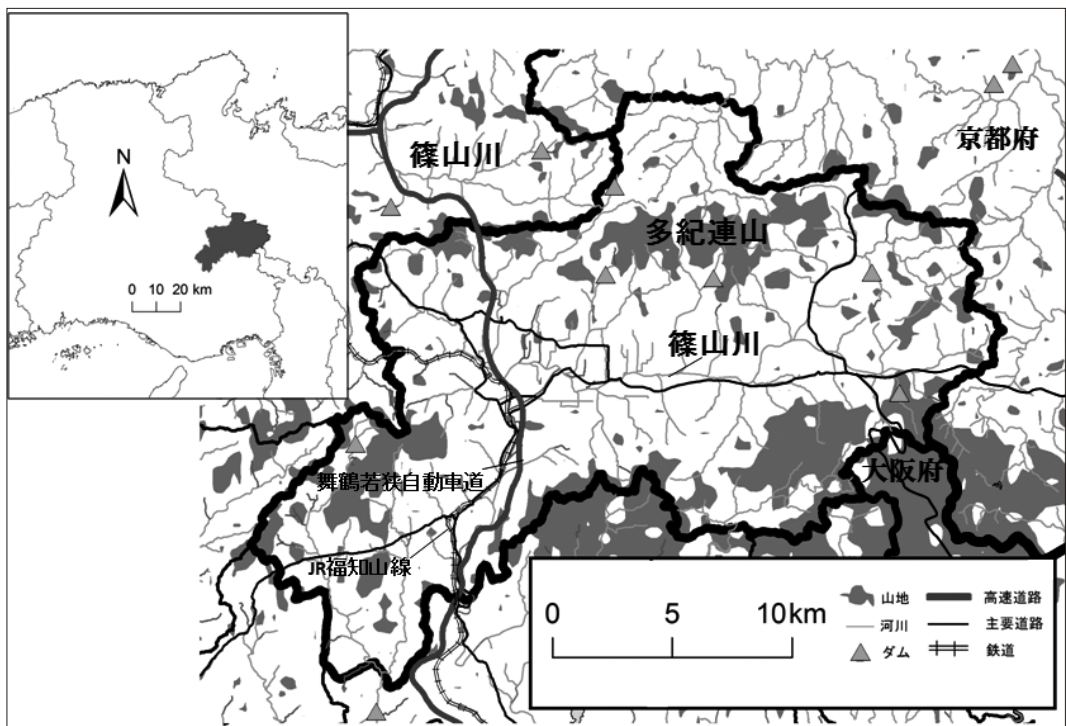


図1：篠山市の位置・概況

(筆者作成)

1) 2022年2月(本稿の投稿時)現在の兵庫県丹波篠山市の市域にあたる。篠山市は2018年11月に市名変更についての住民投票を行い、そこで賛成多数となったため、2019年5月より丹波篠山市に改称された。本稿は2015年の調査をもとに書かれた論考であるから、当市の旧称である「篠山市」を使用している。

の町すべてが合併して現在の市域となった(兵庫県篠山市 2000, および「篠山市統計書平成26年度版」による)。

次に、当該地域の農業生産に関する条件について述べておく。2010年の時点で、篠山市内には225の農業集落があり、4,274戸の農家と、1,118戸の土地持ち非農家が存在していた(2010年農林業センサス)。農家のうち、販売農家は3,271戸で、農家のうち約77%を占めている。1集落当たりの販売農家はおよそ15戸であり、それぞれの集落で集落営農組織を形成し、協働で稲作を行っている。

当該地域では水田稲作が卓越し、市内の経営耕地面積の95.2%が水田となっている(2010年農林業センサス)。篠山市における2006年<sup>2)</sup>の篠山市農業産出額の品目別構成比を同年の兵庫県の統計と比較してみたい。兵庫県では、1位の畜産(36.4%)・2位の野菜(27.8%)のシェアが目立ち、それに続いて米(26.9%)が3位である。一方、篠山では米が46.2%で一位であり、つづいて豆類が29.5%、3位の野菜が16.0%となる。このように金額ベースでも、篠山の農業における水稻・黒大豆への依存度の大きさがみてとれる。

篠山盆地は盆地底の地下水位が高く、また土質が粘土質であるために、排水が著しく不良であった(高山 1956)。このため、農業は夏期における米の単作のみで、冬期においては水田に湛水して二毛作を行わない状況が長く続いてきた。当該地域の集落では、夏期における水田稲作と、冬期における灘・伊丹への酒造出稼ぎ(丹波杜氏)が農家の家計を支えていた(『続 丹波杜氏』編集委員会編 1995: 100-106)。しかし、1960年代後半以降、大規模な水利・圃場整備事業の進展や、交通基盤の整備、工場の誘致などによる労働市場の変化によって、農家の通勤兼業化が急速に進展し、農業と酒造出稼ぎを基本としていた従来の就業形態が一変した(金子ほか 2006)。1990年代以降は鉄道や高速道路沿いを中心にベッドタウン化が進んでいる。

丹波黒は、このような篠山盆地において、通勤兼業または高齢専業農家により、水田転換畑で栽培されている状況である。

## (2) 丹波黒について

### ア) 栽培特性

「丹波黒」は篠山盆地を起源とする大豆の在来系統群を指す。1941年に、兵庫県農事試験場が当該地域の黒大豆の比較選抜試験を行い、その中の優良種子を「丹波黒」と命名した(兵庫県農林水産部編 1998: 4)。この系統群が持つ特質としては、まず他地域で栽培

2) 市町村レベルの生産品目別農業産出額は、農水省による調査がなされ、2006年まで公開されてきたが、その後は廃止され把握できなくなっている。

される黒大豆と比較して粒径が大きく、極晩生であることが指摘されている。また、大豆品種の中では草姿が大きく、風により倒伏しやすいことも特徴である。

すでに前稿で述べた通り、丹波黒の生産には、苗づくり・移植、支柱立てによる倒伏の防止、登熟を促進するための葉の除去、収穫、子実の選抜といった、一般的な大豆には見られない手作業が非常に多く、さらにブランド化以降は、多地域との競争のための早期収穫の奨励というプレッシャーも生じている（小林 2016）。こうした状況から、丹波黒は現地の農家から「苦労豆」などとも呼ばれており、作業にかかる労力負担が際立った作物である。

### イ) 来歴

戦前の篠山盆地において、一般に黒大豆は農家が畦豆として自給的に栽培し、表1のように、正月をはじめ、5月の田植前や秋祭りの際など、主に行事の際に食される食物として丹波地域の食生活に根付いていた（日本の食生活全集兵庫編集委員会編 1992：244-287）。かつての摂食法は、砂糖を入れて甘く煮る煮豆や米と一緒に炊く黒豆ご飯のほか、神前に供えるための特別な品目もあり、味噌や豆腐、納豆などとして日常的に食する白大豆とは区別されていた。このように、黒大豆は丹波地域の食文化・慣行と深く関わりながら栽培され、自給的に食されてきた経緯を持つ。一方で、近世より商品用作物として栽培

表1：伝統的な丹波黒の利用法

| 月   | 行事   | 黒大豆の調理法              | 用語についての説明   |
|-----|------|----------------------|---|
| 1月  | 正月   | 煮豆                   | お節料理の中の一品として食される。   |
| 5月  | さびらき | 炒り大豆入りご飯、<br>さびらき    | 「さびらき」は、稲の苗の生育を祈念して10日頃行われる行事名であり、またその時期に食される炒り大豆入りご飯を朴の葉に包んだ料理の名称である。炒り大豆入りご飯のまま朴の葉に包まずに食す場合もある。 |
| 9月  | 秋祭り  | 茹でた枝豆、ぬたあえ、<br>煮豆    | 枝豆をつぶしたものを「ぬた」と呼ぶ。「ぬたあえ」は、ぬたでナスやこんにゃく、ニンジンと和えた料理の名称である。   |
| 10月 | はも祭り | たでのぬたあえ、<br>枝ごと茹でた枝豆 | はも祭りは篠山市内の一部の集落で行われる伝統行事である。この祭りの際に食されるごちそうの中に、たでの実を入れたぬたあえと、枝を取らずに茹でた枝豆が含まれる。                    |
| 12月 | 大晦日  | とうじ豆                 | 「とうじ豆」は、炒った黒大豆をもち米粉を溶かして砂糖を入れたもので絡めた料理の名称である。食用というよりは神前への供え用として調理される。                             |

（日本の食生活全集兵庫編集委員会編 1992：244-287の記載事項を筆者が整理して作成）

し、藩主に献上した集落も存在していた。近世から近代の歴史は、兵庫県農業試験場の研究員であった島原作夫氏により非常に詳しい記述がなされており（島原 2013；2015）、その要点を紹介する。

篠山盆地で黒大豆が栽培されていた根拠となる文献記載としては、延宝5（1677）年、当時の篠山藩の藩主・松平信庸が篠山の地理や史跡、物産を記録させ享保元（1716）年に編纂された『篠山封疆（ほうきょう）史』、1799（寛政11）年発行の『丹波国大絵図』、および天保年間に発行された『天保武鑑』があるという（兵庫県丹波黒振興協議会編 2008：26-29）。特に、『丹波国大絵図』には丹波国の名産として「黒大豆」の記載があるほか、『天保武鑑』では篠山藩の献上品として黒大豆が記されている。

集落レベルでみると、川北とよばれる集落がもっとも古くから黒大豆の商品生産を行っていたとされる。宝暦年間（1751年～1764年）には当時の篠山藩主であった青山家が農産貢物の中でこの村の黒大豆を特に優良と称賛し、庄屋に命じて黒大豆を納めさせ、さらに青山家が精選したものを幕府に献上したとされる（私立多紀郡教育会編 1918：123-124）。

また、日置とよばれる別の集落では、1831（天保2）年に、庄屋の波部六兵衛が、黒大豆の優良種子を村内の農家に配布して栽培を普及させた。近代になると、後継者の波部本次郎が六兵衛から育種を引き継ぎ、より大粒の種子を選抜して「波部黒」と称し、篠山盆地の農家に配布した。波部黒は各道府県の農事試験場や農学校、全国各地の篤農家から種子の提供を要請されるようになり、第二回内国勸業博覧会、第四回内国勸業博覧会の二度にわたり有功賞を受賞している。それにより、「波部黒」の栽培が拡大し、販売先が東京・京都・大阪へと拡大したと記録されている（私立多紀郡教育会編 1918：123-124）。こうした経緯により、篠山では川北集落における「川北大豆」と、日置集落を中心とする「波部黒」という二つのブランドが併存状況となったが、1934年になると郡農会の斡旋によって「丹波黒大豆生産出荷組合」という団体が発足し、当該地域の黒大豆が「丹波黒大豆」の呼称で統一されて販売される状況となった。

こうした歴史がありながらも、技術革新が進んでいなかったため、水稻に比して反収が向上しなかった丹波黒は、戦中から戦後にかけて長らく生産規模が横ばい状態であったか、あるいは衰退していたと考えられる（川上 1960）。

#### ウ) 減反本格化（1970年代後半）以後の丹波黒

前稿で述べた通り、こうした状況が一変し、作付が急拡大するのは、1960年代後半以降に通勤兼業化と離農が急激に進み、さらに1970年代に水田利用再編対策（減反）が本格化する中で、丹波黒が当該地域の水田転作作物と認定されて以降のことである（図2）。中

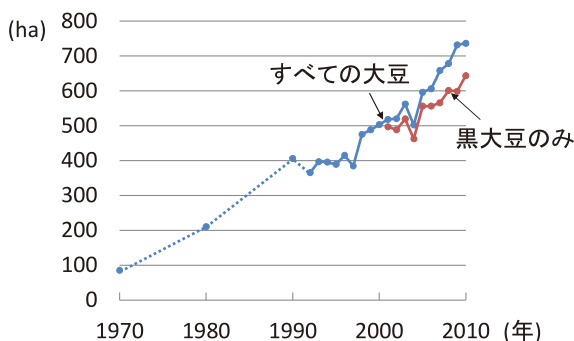


図2：篠山市における大豆作付面積の推移

(丹波農業改良普及センター提供資料により作成)

注) 黒大豆のみの集計は2000年代以降だが、当該地域における大豆作付のほとんどは黒大豆(丹波黒)と考えてよい。

心市街地のある旧篠山町において役場、農協、県普及所、林業事務所、農業委員会などによる篠山町農林振興協議会が1975年に発足し、1979年には篠山町農業協同組合の若手職員を中心に「組織づくり」、「特産物づくり」<sup>3)</sup>、「土づくり」という「三づくり運動」を柱として農家所得を向上させてゆくという、農業振興運動が展開された(瀬戸 1983: 1-5)。これにより、役場・農協・普及所が連携して、「モデル集落」から優先して濃密指導<sup>4)</sup>を行ってゆくことで種々の課題を解決してゆく体制が整えられた(瀬戸 1983: 10)。こうした体制は篠山モデルとして他地域からの視察なども行われた。

これ以後、篠山では集落営農組織の編成も並行して進められ、集落ぐるみで水田稲作と転作対応を行ってゆくケースが増加してゆく<sup>5)</sup>。1970年代以降の丹波黒を論じるにあたっては、このように減反と集落営農という文脈の上で理解する必要がある。

### 3. 農業集落に対する調査とその結果

筆者は2014年の6月から2015年の9月にかけて、集落営農組織の代表者へのインタ

3) 当時の資料では、まず「やまのいも」と称される在来の自然薯、次に「黒大豆」、そして第三に「篠山牛」というブランド肉用牛の飼育が挙げられている(篠山町農業協同組合 1981: 42-43)。丹波黒ではなく「黒大豆」と表記されている点や、それが複数ある特産物の候補の一つと認識されていたことなどが分かり、興味深い。

4) 「濃密指導」とは、農業改良普及員などが農家に対する指導を体系的かつ集中的に行うことを指し、従来の「軒先指導」に対置される概念である。これに関しては旧多紀郡に特有の指導形態ではなく、全国的な潮流として生じていたことであった(山極 2003)。

5) 一方で、筆者が対象とした三つの農業集落では、それぞれに異なった経緯で集落営農組織の形成がなされたが、これについては前稿で言及したため割愛する。

表2：調査の概要

| 集落 | 調査法  | 対象者(人) | 実施・配布(人) | 回答者数(人)／率(%) | 調査期間                  |
|----|------|--------|----------|--------------|-----------------------|
| A  | 郵送   | 54     | 54       | 32／59.3      | 2015年8月16日発送, 8月31日締切 |
| B  | 郵送   | 27     | 21       | 10／47.6      | 2015年7月10日配布, 7月31日締切 |
| C  | 聞き取り | 23     | 23       | 21／91.0      | 2015年6月22日～7月11日      |

(筆者作成)

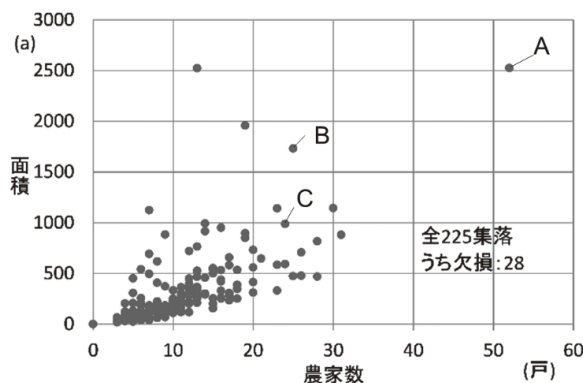


図3：篠山市の集落における大豆の作付面積と農家数

(農林業センサス2010により作成)

注) 図中の記号A・B・Cは筆者が調査した集落を示している。

ビューと、丹波黒を生産する農家への聞き取り調査またはアンケート郵送調査を行った(表2)。

調査は、①集落営農における丹波黒の生産体制の実態、②丹波黒の生産者の経営規模や労働力などの状況、③各農家および集落における丹波黒の経済的・文化的意義、の三点を明らかにする目的で行われた。調査対象集落としては、市内の集落の中でも生産規模が特に大きく(図3)、栽培に熱心に取り組んでいると考えられる集落を三つ選定した(以下A・B・C集落と呼称する)。いずれも盆地底の水田地帯に所在している。

本節以降ではこの調査の結果をメインに、適宜農林業センサスのデータも使用しながら、丹波黒の生産が拡大・存続している条件について明らかにしてゆきたい。

### (1) 農家ごとの経営耕地面積および丹波黒の作付面積

まず、農林業センサスにより篠山市における農家の経営耕地面積の分布をみると、およそ6割の農家は1haに満たない。調査対象者の丹波黒の作付面積をみると、その中央値は10～50aの範囲にある(図4・5)。1ha前後の耕地の転作用作物の作付の規模としては、



兵庫県篠山市の農業集落における丹波黒の生産体制（小林 基）

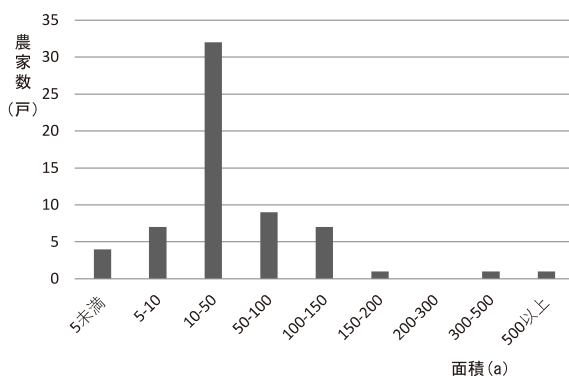


図4：調査対象農家における丹波黒の作付面積の分布

(筆者自身の調査により作成)

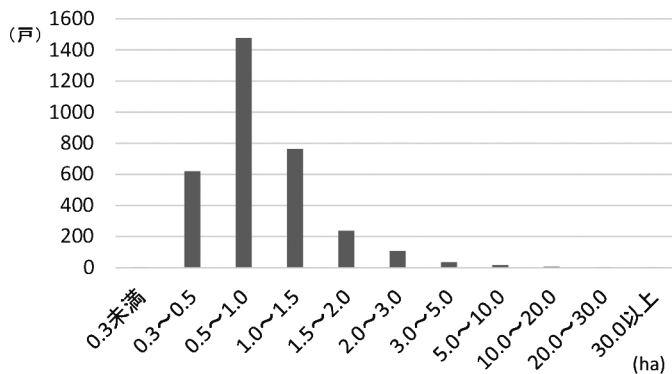


図5：篠山市内農家の経営耕地面積の分布

(農林業センサス2010により作成)

|            |         |      |       |        |         |         |         |         |       |
|------------|---------|------|-------|--------|---------|---------|---------|---------|-------|
| 丹波黒<br>(a) | 500以上   | 0    | 0     | 0      | 0       | 0       | 0       | 0       | 1     |
|            | 300-500 | 0    | 0     | 0      | 0       | 0       | 0       | 1       | 0     |
|            | 200-300 | 0    | 0     | 0      | 0       | 0       | 0       | 0       | 0     |
|            | 150-200 | 0    | 0     | 0      | 0       | 0       | 0       | 1       | 0     |
|            | 100-150 | 1    | 1     | 0      | 4       | 0       | 1       | 0       | 0     |
|            | 50-100  | 2    | 0     | 3      | 5       | 0       | 0       | 0       | 0     |
|            | 10-50   | 6    | 13    | 9      | 4       | 0       | 0       | 0       | 0     |
|            | 5-10    | 5    | 0     | 2      | 0       | 0       | 0       | 0       | 0     |
|            | 5未満     | 3    | 1     | 0      | 0       | 0       | 0       | 0       | 0     |
|            |         | 30未満 | 30-50 | 50-100 | 100-150 | 150-200 | 200-300 | 300-500 | 500以上 |

水稻 (a)

図6：調査対象集落における丹波黒・水稻作付面積規模ごとの農家数

(筆者自身の調査により作成)

一般的な水準と考えられる。一方で、個々の農家の水稻の作付面積との関係についてみると、水稻と丹波黒の面積の割合には農家ごとにばらつきがあることが分かる(図6)。

ここで丹波黒の作付面積がどのように決まるのかについて検討しておこう。まず、篠山市の担当部署(農都創造課)への聞き取りによると、減反の達成目標については県から市に通達され、市が各集落に数値目標を割り振る仕組みである。これは全国の一般的な水田農業と同様である(荒幡 2015: 15-19)。

しかし、経営耕地のどのくらいを丹波黒に割り当てるかは、各農家の事情によってある程度変動する。丹波黒の場合、栽培には手間がかかることから<sup>6)</sup>、それぞれの農家が確保できる労働力、意欲が規定要因となり、一定以上の作付面積を確保することが難しい。農地が大きな農家や農作業に多くの負担をかけられない農家の分を、他の農家や集落営農組織が負担するなどして補い合う。面積割合を大きくできない農家の分を集落としていかに負担するかについては、C集落で詳しい事情を聞くことができたので、紹介しておきたい。

C集落には、組合が管理する農地と個々の世帯が保有・管理する農地とが存在している。まず前者については、耕作放棄地など集落内の農家が管理できなくなった農地の作業を請け負っている。これらの農地は七つのブロックに分けられ、作付のローテーションがなされている<sup>7)</sup>。なお、各区画における作付のサイクルは「黒大豆-黒大豆-黒大豆-水稻」の四年周期であり、二毛作は行わない。これらの農地では、事業部会が中心となって黒大豆の生産・収穫・出荷を行い、収益はすべて組合の人件費・イベントでの物品販売にかかる費用に回される。

個々の世帯が保有・管理する農地については、個々の農家の裁量に任されており、集落営農組織を通じて共同で行う作業としては、5月から9月にかけての週末に行われる共同防除、および11月下旬以降の乾燥・脱粒・選別作業のみである。それ以外の作業については、各農家から要請があった場合に、集落営農組織が作業を個別に請負っているが、作業請負を依頼した農家は、事業部会に請負賃を支払わなければならない。

まとめると、丹波黒への転作分の農地は、個々の農家が管理する部分と集落営農組織が管理する部分とに分かれており、集落全体で転作を達成する体制が作られている(なお、

---

6) 丹波黒の具体的な農作業・農事暦については前稿(小林 2016)を参照されたい。

7) 集落全体で農地をいくつかのブロック(団地)に分け、数年周期で異なるブロックをローテーションして作付してゆくことを一般に「ブロックローテーション」と呼ぶ。ブロックに集約することで防除や水管理といった共同作業にかかる手間を省くほか、ローテーションにより大豆等の作物の連作障害を防ぐ目的がある。

集落営農組織が管理する部分は無視できない大きさで存在すると考えられるが、詳細なデータは集められていない)。そして個々の農家が所有・管理する農地についても、部分的な共同作業や作業の請負がみられる。しかしながら、請負の負担や集落全体の労働力の限界などのプレッシャーが存在し、個々の農家も集落全体としても、丹波黒の作付面積を際限なく広げることは難しい。

こうした点も踏まえ、次節以降ではそれぞれの農家の労働力や、丹波黒を栽培する理由・動機などについて検討してみたい。

## (2) 農家が利用できる内外の労働力について

筆者の調査に回答してもらった農家の労働力をリストにすると表3のようになる。

まず、最も詳しい情報が分かるA集落から、丹波黒の作付面積の規模ごとに検討してみたい。

もっとも規模の大きいA集落の50a以上層は、定年を迎えた65～74歳の前期高齢者の世帯主が主体となって農作業に従事し、妻が作業を手伝うというパターンが大半を占める。この年代は集落営農組織の役職に就く人も多く、もっとも積極的に農業に取り組んでいるといえる。また、同居の家族以外にも、親戚やアルバイトを利用しているほか、神戸大学など近隣の大学の学生ボランティアなどを受け入れているのも大規模層の特徴となっている。

他方で10a以上50a未満層、10a未満層と規模が小さくなるにつれて若手や後期高齢者層が目立つようになる。10a以上50a未満層の若手では、妻か同居の母が、後期高齢者では専ら妻が、農作業を手伝っている。この層では若手を中心にアルバイトや親せきの助力を得ているが、ボランティアの受け入れは見られない。10a未満層では、後期高齢者の世帯主と妻が、集落営農組織や別居する親戚の助力を得て生産を続けているようである。

こうしてみると、大規模層では、農業に時間と労力を割ける世帯主がおり、アルバイトやボランティアを活用して生産を担っているといった傾向が見えてくる。

他方で、集落自体の規模がA集落に比して小さいB集落をみると、大規模層ではむしろ65歳未満の若手農家層が目立ち、これらの世代が集落営農組織の役職も担っていることから、より若い世代が中心になって集落の農業を支えていることが分かる。A集落の集落営農組織が1982年に、C集落の組織が1984年に結成された一方で、B集落の組織は1994年に結成されていることから、後発の集落では担い手の中心となる年齢層が若くなっている可能性があるだろう。

なお、B集落でアルバイトやボランティアを受け入れているのも50a以上層のみである。

表3：調査対象農家が保有または活用する労働力

| 面積            | 集落                             | 類型       | 世帯の外部からの労働力 |        |     |      |       | 世帯主の<br>役職        | 家族労働力 |   |
|---------------|--------------------------------|----------|-------------|--------|-----|------|-------|-------------------|-------|---|
|               |                                |          | アルバイト       | ボランティア | 親せき | 生産組合 | その他   |                   |       |   |
| 50<br>a<br>以上 | A                              | 65歳未満-1  | ○           |        |     |      |       | ○                 | -     |   |
|               |                                | 65歳未満-3  |             |        | ○   |      |       |                   | 父・母・妻 |   |
|               |                                | 65~74歳-1 |             |        | ○   | ○    |       |                   | -     |   |
|               |                                | 65~74歳-2 |             |        | ○   |      |       | ○                 | 妻     |   |
|               |                                | 65~74歳-2 |             | ○      |     |      |       |                   | 妻     |   |
|               |                                | 65~74歳-2 | ○           | ○      |     |      |       |                   | 妻     |   |
|               |                                | 65~74歳-3 | ○           |        |     |      |       | ○                 | ?     |   |
|               | 65~74歳-3                       |          |             | ○      |     |      |       | 妻・長男              |       |   |
|               | 75歳以上-2                        |          |             |        | ○   |      |       | 妻                 |       |   |
|               | 75歳以上-4                        | ○        |             | ○      |     |      | ○(長男) | 妻・長男・嫁            |       |   |
|               | 65歳未満-2                        |          |             |        |     |      |       | 妻                 |       |   |
|               | 65歳未満-2                        |          |             | ○      |     | ○    |       | 母                 |       |   |
|               | 65歳未満-3                        |          |             |        |     |      | ○     | 妻・息子              |       |   |
|               | 65歳未満-3                        |          | ○           |        |     | ○    | ○     | 母・妻               |       |   |
|               | 65~74歳-2                       | ○        | ○           |        |     | ○    |       | 妻                 |       |   |
|               | 65歳未満-2                        |          |             |        |     |      |       | 母・妻               |       |   |
|               | 75歳以上-2                        | ?        | ?           | ?      | ?   | ?    | ○     | 妻                 |       |   |
|               | 75歳以上-4                        |          |             |        |     | ○    |       | 弟・甥・息子・息子         |       |   |
|               | 10<br>a<br>以上<br>50<br>a<br>未満 | A        | 65歳未満-1     |        |     | ○    |       |                   |       | - |
|               |                                |          | 65歳未満-2     |        |     |      | ○     | ○                 |       | ? |
|               |                                |          | 65歳未満-2     | ○      |     |      |       |                   |       | 母 |
| 65歳未満-2       |                                |          |             |        |     |      |       |                   | 妻     |   |
| 65歳未満-2       |                                |          | ○           |        | ○   |      |       |                   | 母     |   |
| 65歳未満-2       |                                |          |             |        | ○   |      |       |                   | 妻     |   |
| 65歳未満-3       |                                |          |             |        |     | ○    |       |                   | 母・妻   |   |
| 65歳未満-3       |                                |          |             |        |     |      | ○     | ○                 | 母・妻   |   |
| 65~74歳-1      |                                |          | ○           |        | ○   |      |       | ○                 | -     |   |
| 65~74歳-2      |                                |          |             |        |     |      | ○     | ○                 | 妻     |   |
| 75歳以上-2       |                                |          |             |        |     |      |       |                   | 妻     |   |
| 75歳以上-2       |                                |          |             |        |     |      |       | 妻                 |       |   |
| 75歳以上-2       |                                |          |             |        | ○   | ○    |       | 息子・娘<br>(世帯主従事なし) |       |   |
| 75歳以上-2       |                                |          |             |        |     |      |       | 妻                 |       |   |
| 65歳未満-2       |                                |          |             |        |     |      |       | 妻                 |       |   |
| 75歳以上-4       |                                |          |             | ○      |     |      |       | 妻・長男・嫁            |       |   |
| 65歳未満-1       |                                | ?        | ?           | ?      | ?   | ?    |       | 母<br>(世帯主従事なし)    |       |   |
| 65歳未満-2       |                                | ?        | ?           | ?      | ?   | ?    | ○     | 妻                 |       |   |
| 65歳未満-3       |                                | ?        | ?           | ?      | ?   | ?    | ○     | 母・妻               |       |   |
| 65歳未満-3       |                                | ?        | ?           | ?      | ?   | ?    | ○     | 母・妻               |       |   |
| 65~74歳-1      |                                | ?        | ?           | ?      | ?   | ?    |       | (世帯主は女性)          |       |   |
| 65~74歳-2      | ?                              | ?        | ?           | ?      | ?   |      | 妻     |                   |       |   |
| 65~74歳-2      | ?                              | ?        | ?           | ?      | ?   | ○    | 妻     |                   |       |   |
| 65~74歳-2      | ?                              | ?        | ?           | ?      | ?   | ○    | 妻     |                   |       |   |
| 65~74歳-3      | ?                              | ?        | ?           | ?      | ?   |      | 妻・息子  |                   |       |   |
| 75歳以上-1       | ?                              | ?        | ?           | ?      | ?   |      | -     |                   |       |   |
| 75歳以上-3       | ?                              | ?        | ?           | ?      | ?   |      | 妻・娘   |                   |       |   |
| 75歳以上-2       | ?                              | ?        | ?           | ?      | ?   |      | 妻     |                   |       |   |
| 75歳以上-3       | ?                              | ?        | ?           | ?      | ?   |      | 妻・娘   |                   |       |   |
| 10<br>a<br>未満 | A                              | 65歳未満-2  |             |        | ○   |      |       | 妻                 |       |   |
|               |                                | 75歳以上-1  |             |        |     |      | ○     | 妻                 |       |   |
|               |                                | 75歳以上-2  |             |        | ○   |      |       | 妻                 |       |   |
|               |                                | 75歳以上-2  |             |        |     |      | ○     | 妻                 |       |   |
|               | 65歳未満-4                        |          |             |        |     | ○    |       | 母・姉・妻             |       |   |
|               | 65歳未満-1                        | ?        | ?           | ?      | ?   | ?    |       | -                 |       |   |
|               | 65歳未満-2                        | ?        | ?           | ?      | ?   | ?    |       | 母                 |       |   |
| 65~74歳-1      | ?                              | ?        | ?           | ?      | ?   | ○    | -     |                   |       |   |
| 65~74歳-2      | ?                              | ?        | ?           | ?      | ?   |      | 妻     |                   |       |   |

(筆者自身の調査により作成)

注) 回答が得られた世帯のみ掲載。「類型」は、世帯主の年齢と世帯内の農業従事者の人数を表す。「世帯主の役職」は、世帯主が生産組合の役員やオペレーターである場合を指す。記号「?」は、聞き取りを行っていない項目、または回答を得られなかった項目を指す。

C集落では50a以上層は3戸のみであり、うち一戸は一家で集落内外の農作業を広範囲に請負う専業農家である。

筆者の調査対象はたった三つの集落であるから、これを篠山盆地全体の傾向として単純に一般化することには、十分に慎重になる必要がある。それを承知のうえで上記をまとめると、集落営農体制づくりに尽力したか、あるいはその運営においても中心的な役割を担っている世代である50～60歳代くらいの世代がより積極的かつ大規模に丹波黒を作付していること、それらの農家ではアルバイトやボランティア、別居する親戚などの伝手を持っていること、後期高齢者層では大規模な生産が難しくなること、などの仮説が設定できるであろう。

### （3）丹波黒を作付する理由

では、農家の人々はどのような理由によって丹波黒を生産し続けているのであろうか。筆者の聞き取りによると、以下のような回答が得られた（図7）。

この質問については、必ず二つ以上の項目を選ぶこと、また「特になし」の項目を設けなかったために、バイアスがかかっている可能性があるものの、その点に注意しつつ手がかりとして利用したい。

まず、「利益が大きいから」が最も多くの農家を選んだ理由となっている。このことから、丹波黒は一定程度の収益性が見込める農産物として認識されていることが分かる。しかし、そもそも当該地域の農家は第二種兼業農家が多いため、農業収入自体を家計の中であまり重視していないことが前提であることには注意されたい。これについては、市内最大規模のA集落の聞き取りで得た「農業を続けている理由」についての回答として、「家の農地を維持するため」、「家庭で消費する食べ物を自給するため」といった選択肢が多数となった、図8の結果が得られていることから明らかである。丹波黒の作付が市内最大規模の集落においてさえ、農業が農地維持のために行われているケースが多いことは注目に値する。農業収入および丹波黒の収入については、次節でもう少し詳しく検討してみたい。

次に、「減反のため仕方なく栽培している」という理由が2位となっている。これは労力がかかるために本心では生産規模を縮小したいが、減反や農地維持など何らかの理由でそれが適わないという事情を抱える農家が一定数存在していることを示唆しており、重要である。

3～4位の回答は、それぞれ「知り合いや親せきに贈るため」、「自分や家族が食べたいと思っているから」であり、単に収益性というメリットに還元しきれない丹波黒の意義が

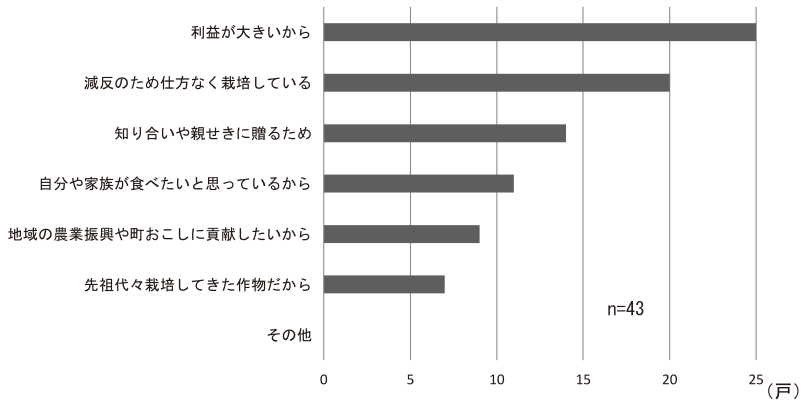


図7：丹波黒を生産し続けている理由（3集落合計）

（筆者自身の調査により作成）

注）nは有効回答者数を示す。回答は、1人当たり必ず2項目を選択するよう指定した。

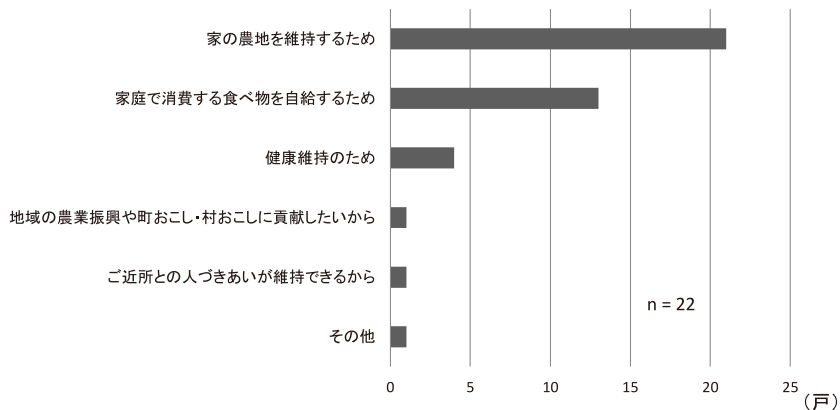


図8：農業を続けている理由（A集落のみ）

（筆者自身の調査により作成）

注）nは有効回答者数を示す。回答は、1人当たり必ず2項目を選択するよう指定した。

見て取れる。特に後者については、生産拡大とブランディングが進んで以降、正月などに食される行事食であった丹波黒が、現地で日常的に食されるようになり、味噌・豆腐・納豆、ポン菓子などに調理されて食されており、興味深い。

5位が「地域の農業振興や町おこしに貢献したいから」という理由、6位が「先祖代々栽培してきた作物だから」という理由となった。

上記をまとめると、おおまかにみて丹波黒は「農地を維持」するために続けている農業の中で減反対応のために「仕方なく」生産している部分もあるが、相対的に「利益」が見込める作物であると認識されている作物であると理解できる。また、経済的意義だけでは

く、贈答品や日常食として親しまれており、地域社会とその食文化の中に「埋め込まれた (embedded)」作物（伊賀 2013）と表現することもできるかもしれない。

#### （4）農業収入と丹波黒の位置づけ

調査対象農家の農業収入の位置づけや、その中での丹波黒の位置づけについてみてみたい。調査対象農家のおよそ5割は、農業により得られる収入が総収入のうち10%に満たないと回答した。図9にみるように、この農業収入の割合が30%未満の農家層の中には、丹波黒の作付面積が50a以上と、比較的規模の大きな農家層も含まれている。このことは、

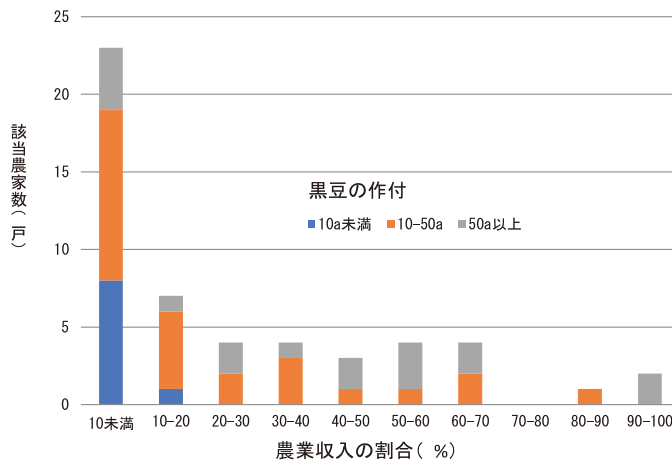


図9：総収入における農業収入の割合

（筆者自身の調査により作成）

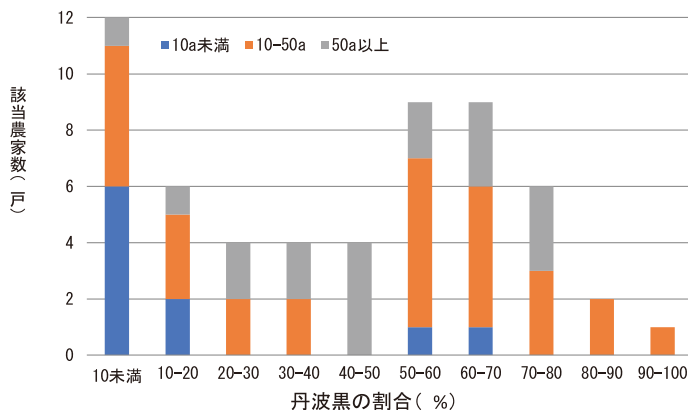


図10：農業所得のうち丹波黒の販売額が占める割合

（筆者自身の調査により作成）

丹波黒の作付が大きいからといって必ずしも所得への貢献度が高くなるとは限らないことを示している。他作物との複合経営の有無や、総所得自体の大きさの違いにも注意すべきだろう。一方で、農業収入が2割、3割と上がってゆくと、小規模な10a未満層は見られなくなる。丹波黒の作付10a未満層10名のうち7名は水稻作付面積も30a未満であり、農業そのものへの依存度自体がかなり低い層であるといえる。

次に、農業収入の中で丹波黒の販売額が占める割合について尋ねたところ、これについても大きなばらつきがあり、10%未満の層と、50%から70%未満の層とが二つのピークを成していることが分かる(図10)。

図10は、面積の大小にかかわらず、丹波黒の農業所得への貢献度には格差があることを示している。これについては、丹波黒を栽培する技術の巧拙が関係しているかもしれないが、筆者の聞き取りでは、「枝豆として出荷する割合をどれくらい大きくできるか」が重要であるという見解もあることが分かった<sup>8)</sup>。

枝豆は丹波黒が十分に登熟して「黒豆」になる前の時期(10月)の3~4週間の間に収穫する。小林(2016)でも言及したように、枝豆は農家での「軒先販売」が行われている。これは農家のもとに消費者が直接来訪して枝豆を買い付けに来るというものである。行政は市内において丹波黒の枝豆を取り扱う商店及び軒先販売を行う農家を登録制にし、毎年10月5日を市内産丹波黒販売の「解禁日」に指定して、徹底したブランド管理を行っている。近年では枝豆が有名になってきたことで単価が高まり、面積当たり収益は枝豆として収穫するほうが黒豆よりも高くなるという。しかしながら、枝豆の収穫・選別・荷造り・販売は個々の農家単位で行われるので、販売量を多くしようとすれば10月に集中的に多くの労働量を投下する必要がある。このため、枝豆の販売量も、結局は労働力に規定されるという。したがって、丹波黒の作付面積が等しい場合であっても、農家による栽培技術の巧拙、そして利用できる労働力の格差が収益性の差異を生む可能性が考えられるのである。

上記の諸点を踏まえたうえで、以下では農業収入別にもう少し詳しく農家の状況をみてみたい。

#### ア) 農業収入が80%以上の農家

回答した農家は3戸あり、うち二名はA集落の営農組織の前組合長、B集落営農組織の現組合長である(いずれも調査時点)。C集落にはこの層は存在しなかった。両者とも農

---

8) 以下、枝豆の収益性についてはB集落営農組織の生産組合長などへの聞き取りによる。



作業従事者は世帯主を含め5～6名と多く、前者は1ha以上の丹波黒の作付に加え、家畜飼養も行っている。後者は、3haを超える規模で丹波黒を作付している。この二戸の農家においては、丹波黒が農業収入に占める割合は40～50%の間と回答している。A集落の元組合長は、毎年面積ベースで50%以上を枝豆として収穫しているが、家畜に加え水稻を1ha以上作付している。またB集落の組合長は5～10%程度を枝豆として収穫する。こちらは5haを超えて大規模に水稻作付を行っており、米の販売による収入も大きい。

残りの農家一戸は、丹波黒の作付は10～50aと標準的だが、100頭を超える肉牛を飼育しており、丹波黒が農業収入に占める割合としては10%に満たない。むしろ畜産による収入が大きいものと考えられる。篠山における畜産業従事者は少ないものの、かつて1980年代に篠山牛として特産物化を図ることが検討されたこともあり、農業への依存度が大きな一部の農家では、このような複合経営が行われている可能性も否定できない。B集落組合長と肉牛飼育農家は、減反対応を理由に丹波黒を栽培しており、特に前者は「利益が大きいから」ではなく「先祖代々栽培してきた作物だから」をもう一つの理由に挙げていた。

このように農業収入が家計において80%以上と非常に重要な地位を占める農家層では、丹波黒の経済的利益への依存度は大きいところでもせいぜい50%足らずであった。豊富な労働力と、筆者による調査では例外的とはいえ家畜飼養との複合経営が興味深い。その他の層とも比較してみたい。

#### イ) 農業収入が50～70%の間に入る農家

この層は8戸であった。いずれもAまたはB集落の農家でありC集落の農家は該当なしである。この層では、丹波黒の作付が10aを下回る農家は見られなかった。

丹波黒の作付が1haを超える農家は3戸あり、三者とも黒豆は「利益が大きいから」栽培しており、減反は理由に挙げていなかった。丹波黒が農業収入に占める割合は、1.5ha～2haの間で作付している農家一戸が70～80%、残り二戸は1～1.5haの作付で、40～50%または60～70%と回答しており、この層における丹波黒の重要度は相対的に高いといえよう。

まず、丹波黒が農業収入に占める割合が70～80%と回答した農家は世帯主の夫婦が60代で、集落営農組織における農業機械のオペレーターを務め、30代の息子も農業を手伝っており、さらに繁忙期にアルバイトも雇用している。この息子は農業を引き継ぐ意向を世帯主にすでに伝えており、農業に積極的であることが分かる。毎年20～30%程度は枝豆として収穫・販売する。このほか、3ha以上の水稻作付のほか、5a未満の畑作園芸も行う。

このほか、丹波黒が農業収入に占める割合が60～70%と回答した農家もまた、60代夫婦と80代母、さらに30代息子が農作業に従事している。黒大豆と稲作の作付はいずれも1～

1.5haと同程度であり、その他の販売用作物は生産していない。そして、40～50%と回答した農家は70代の夫婦二人で黒大豆と稲作それぞれ1～1.5haを作付し、学生ボランティアも受け入れているが、今後は面積を縮小したい意向である。二戸とも、10～20%程度を枝豆として収穫・販売する。

次に、丹波黒が50a以上1ha未満の層は2戸ある。前者は70代の世帯主と40代の息子を含む7名もの人が農作業に従事しており、別居する親戚の手伝いも得られている。ただし作付は水稻が1～1.5haあるのに対し、丹波黒はやや小さい。面積ベースで5～10%を枝豆収穫用にあてる。「利益が大きいから」「地域の農業振興や町おこし・村おこしに貢献したいから」を理由に黒大豆を栽培している。もう一方の農家は60代の世帯主夫婦と80代の母親が農業に従事しており、丹波黒のほか50a～1haの間で畑作園芸も行っている。丹波黒が農業収入に占める割合は50～60%と大きく、「利益が大きいから」生産を続けたいが、規模自体は今後縮小したい意向である。

丹波黒が10～50a未満の層は3戸あり、うち2戸は5a未満の畑作園芸を行っている。「利益が大きいから」、「減反のために仕方なく」丹波黒を栽培している農家がそれぞれ1戸ずつあった。50代の世帯主とその親夫婦の同居、70代夫婦二人の農家があり、残り一戸の詳細は不明である。この3戸において丹波黒が農業収入に占める割合は50～90%と重要である。5割以上を枝豆として収穫する農家もある。

このように農業収入が50～70%の間に入る農家では、丹波黒が農業収入において一定以上の地位を占めていることが分かる。丹波黒が農業収入に占める割合が大きい農家では、さまざまな手段で労働力を確保し、一定以上の面積割合を確保していることが見て取れる。一方、経営耕地の規模が大きい場合や労働力が少ない場合には水稻を大きくせざるを得ず、それによって丹波黒が農業収入に占める割合が小さくなっている場合もみられる。それぞれの農家の経営規模の中で、限りある労働力をどのように仕向けるか考え、農地がかなり大きい場合には水稻に労力を割かざるを得ないという事情が読み取れる。また、小規模ながら畑作園芸との複合が行われている場合についても無視できない。

#### ウ) 農業収入が30～50%の間に入る農家

この層は7戸である。まず、丹波黒が50aを超える層は3戸あり、いずれもA集落の農家であった。作付が1haを超える二戸のうち、一戸は水稻が30a未満、もう一方は2～3haと対照的である。前者は40代男性一人で農作業を行う熱心な若手農家であり、「子どもたちの将来のために」無農薬栽培を実践しているという。小規模ながら畑作園芸や樹園地もある。丹波黒は毎年40～50%を枝豆として収穫し、丹波黒が農業収入に占める割合は

70～80%にのぼる。もう一方は、60代の世帯主夫妻と80代の両親、20代の息子が農業に従事する。丹波黒が農業収入に占める割合は20～30%である。作付が50a～1haの農家は、同じ規模で水稲作付を行っている。70代の夫婦で農作業をしている。丹波黒が農業収入に占める割合は30～40%である。枝豆として収穫する面積は5%に満たない。

次に、丹波黒の作付が50a未満の農家4戸をみてみたい。これら農家では、丹波黒が農業収入に占める割合が10～20%と回答した農家が1戸、70～80%と回答した農家が2戸あり、大きな差がある。前者は60代夫婦が農作業に従事し、稲作が1ha以上と大きい。これ対し、後二者は70代または60代夫婦が農作業に従事し、稲作が30～50a程度となっている。また、前者では枝豆の収穫を行っておらず、後二者では、枝豆の収穫を1割～2割強の割合で行っている。興味深いことに、前者では「自分や家族が食べるため」に丹波黒を栽培しているが、後二者では「利益が大きいから」かつ「減反のため仕方なく」丹波黒を生産している。

以上のように、水稲作の規模が大きい農家では丹波黒に振り向ける労力や手間暇も小さくなり、丹波黒が農業収入に占める割合が小さくなっているように見える。なお、水稲作の規模と丹波黒の収益性とは、どちらが原因でありどちらが結果なのか、判断が難しい。

### エ) 農業収入が30%未満の農家

これに該当する農家は34戸あった。数が多いため、丹波黒の作付や農業収入に占める割合で区分して概況を述べる。

丹波黒の作付が1～1.5haの農家はB集落の1戸のみである。1～1.5haの水稲を作付している。丹波黒は男性一名、女性二名が農作業を行い、丹波黒の20～30%は枝豆として収穫する。農業収入における丹波黒の割合は50～60%である。

丹波黒の作付が50a以上1ha未満の層は6戸である。稲作の規模の大きさには1ha以上からゼロまで幅広い。ただし、稲作の規模が小さいほど丹波黒が農業収入に占める割合は大きくなるとはかぎらず、水稲作付がゼロである農家では丹波黒が農業収入に占める割合も10%未満と小さかった。なお、5a未満の畑作園芸を行っている。その他、稲作1ha以上の2戸では、丹波黒が農業収入に占める割合は3割未満であり、稲作が1ha未満の農家2戸では丹波黒が農業収入に占める割合が40～50、70～80%の農家もあった。

丹波黒の作付が10a以上50a未満の農家は18戸である。うち13戸が小規模な畑作・樹園地の経営を組み合わせで行っており、このような農家が丹波黒が農業収入に占める割合の大小にかぎらず分布していることは特徴的である。まず、丹波黒が農業収入に占める割合が80%以上の農家は7戸あった。いずれも水稲は1ha未満だが、うち5戸は畑作および果

樹との複合経営でもある。枝豆の収穫を行っているのは三戸にとどまり、いずれも20%未満である。丹波黒が農業収入に占める割合が50~80%の農家は6戸であり、水稲作付30~50aの規模が4戸、50以上が二戸あった。枝豆の収穫を行っているのは三戸のみであった。最後は丹波黒が農業収入に占める割合が40%未満と回答した9戸となり、残り二戸は無回答であった。すべての農家が30~50a、50~1haの間で水稲の作付を行っているが、一戸を除くほとんどが枝豆の収穫も行っている。ただし、20%以上枝豆として収穫している農家は二戸のみであり、残りは20%未満である。

以上の結果から、丹波黒の経済的な重要性や位置づけは農家によって異なっていることが分かる。かなりおおまかな分類ではあるが、単純化すると、①丹波黒の作付が卓越するパターン、②水稲作が卓越するパターン、③複合経営のパターン、そして例外的に④畜産が突出するパターンの四つが少なくとも見出せた。

①は丹波黒が農業収入に占める割合が大きくなり、農業収入が50~70%の層を中心に、水稲作に比して丹波黒の作付の規模が同等かそれ以上の規模になる。一方、水稲作が丹波黒より大規模に作付されている②のパターンでは、丹波黒が農業収入に占める割合は小さい傾向がある。経営耕地が大きい農家や、労働力が多くない農家では、丹波黒の作付規模を一定以上に拡大できず、稲作が大きくならざるを得ないことが、②のパターンを生み出しているといえるだろう。

また、丹波黒を作付する動機やその強さもまた、丹波黒の作付規模に影響しうるかもしれない。その収益性の高さから作付を行うのか、あるいは自家消費用に行うのか、といった差異である。収益性も多くの農家にとっては減反対応という条件付きの評価である。

畑作・樹園地や家畜飼育などとの複合経営を行っている③では、水稲作が相対的に小さくても丹波黒が農業収入に占める割合は小さくなるように読み取れるが、農業収入が30%未満かつ丹波黒の作付が10a以上50a未満の農家ではやや異なる傾向であった。これは農業収入への依存度が大きい層と小さい層との間で、畑作・樹園地の経営へのコミットの大小が存在するためかと考えられる。

なお、筆者は今後も丹波黒を栽培し続けたいかについて意向を聞く質問をアンケートに組み込んでいた。有効回答60戸のうち、「栽培を続けたくない」と回答した農家はわずか三戸であり、「分からない」が12戸、「続けたい」が45戸であった。こうした結果から、その積極性に差はあるが、栽培すること自体をやめたいという農家は少ないことが分かった。

#### (5) 農家にとっての文化的・社会的意義

筆者のアンケートによると、経営規模の大小にかぎらず、「自分や家族が食べるため」や、「知り合いや親せきに贈るため」といった理由で丹波黒を栽培している。丹波黒は自給用または贈答品として地域に受容されつつあることがここから読み取れる。

なお、「知り合いや親せきに贈るため」と回答した15戸のうち12戸が、「自分や家族が食べるため」と回答している13戸の農家のうち11戸が、今後も「栽培を続けたい」という意向を示しており、「続けたいと思わない」を選択した農家はなかった。

すでに小林(2016)で述べたが、調査対象農家においては、丹波黒を味噌や豆腐、納豆などとして常食する人がおり、枝豆を冷凍庫に保存して一年中食べている農家もあった。本稿の冒頭に述べたとおり、丹波黒は篠山においてもかつては行事食として摂食されてきた歴史を持つが、生産が拡大される中で日常食として親しまれるようになったことが分かる。

また贈答については、農家の中に枝豆をもっぱら贈答用に収穫しているという事例があった。筆者はB集落で、枝豆の収穫時期に枝豆収穫の手伝い作業を行ったが、この時期には大学生や農家の親せきなどが収穫作業の手伝いに頻繁に来訪していた。また、枝豆については軒先販売という農家と消費者の直接取引が行われている。枝豆の収穫や販売を通じて、農家が様々な人々と社会関係を形成・維持している可能性もあり、興味深い。

#### (6) 補論：丹波黒の種子供給について

小林(2016)では、丹波黒の種子の供給がどのようになされているのか言及できなかった。これは在来品種を保全し、産地を維持してゆく観点からは欠かせないことであり、ここで詳述しておきたい。

図11はA集落の農家の種子の入手先である。これをみると、A集落でもっとも多くの人が種子を入手しているのは農協だが、ブランド化が進んだ現在でも自家採種を行っている農家が一定数存在することは注目に値する。小田垣商店は、当該地域で最大規模の丹波黒の卸売業者であり、丹波黒の普及や流通経路の形成に大きく貢献してきた。

ここで、自家採種以外の種子供給経路について述べておきたい。農協では、篠山における優良種子から県農業試験場が選抜した系統である「兵系黒3号」と、波部黒および川北大豆の原種を、小田垣商店では波部黒・川北大豆の原種を増殖させ、採種農家に委託して種子を増やしてもらい、一般の農家へと販売している。農協では、それぞれの土地に適合した系統を栽培してもらう目的で、地域ごとに販売する種子の種類を決めてあるが、集荷の際には系統の区別をせずに販売している。

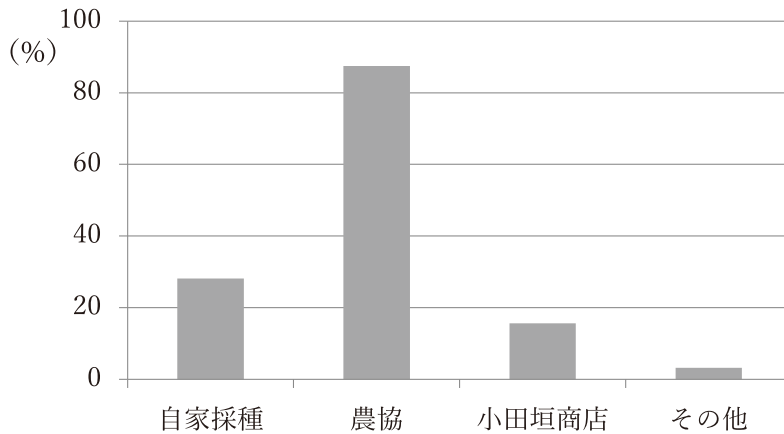


図11：A集落における農家の丹波黒種子の入手先

(筆者自身の調査により作成)

注) 複数回答可。有効回答は32(戸)。

農協や卸売業者にとって、種子の系統の区別はあくまで生産過程においてのみ問題となるものであり、販売に際してはそれらの系統を区別する意義は見出されていない。この理由として、収穫された丹波黒がいずれの系統であるかを見分けることが極めて困難であることが聞かれた。なお、篠山を起源とするもの以外の種子が紛れ込まないように、県農試を中心に遺伝子検査体制がつくられており、種子生産圃場での定期検査がなされている。

#### 4. 結びにかえて

本稿では、丹波黒が農家および農業集落レベルにおいていかに生産されているかに注目し、筆者の調査結果をもとに検討してきた。

丹波黒は第二種兼業農家が大部分を占める水田稲作地帯において、減反対応と集落営農体制が形成される中で生産が拡大されてきた。丹波黒には、集落営農組織単位で栽培を行う圃場と、個々の農家が生産を担うものがある。集落単位で減反目標を達成する中で、丹波黒の作付面積が拡大・維持されてきた。

一方で、個々の農家レベルで見ると、水稻が卓越するパターンと丹波黒が卓越するパターン、そして複合経営がある。丹波黒の位置づけは農家によって異なっており、世帯の収入源として重要な地位を占めている事例も見られた。しかし、経営耕地が大きい農家や、労働力が多くない農家では、丹波黒の作付規模を一定以上に拡大できず、稲作が大きくならざるを得ないため、相対的に丹波黒の地位が低いといった場合もみられる。

丹波黒を栽培する動機をみると、その収益性の高さから作付を行う場合が最も多いが、

同時に減反対応のために仕方なく生産しているという回答も少なくない。また、「自分や家族が食べるため」や、「知り合いや親せきに贈るため」といった理由で丹波黒を栽培している農家が無視できない数で存在しており、文化的・社会的に一定の意義を持つ作物として評価されているともいえる。

このようにみると、農地の維持や減反という大きな社会経済的状況の中で生産されているとはいえ、これを「消極的な動機による生産」とひとくくりに理解するのは、やや平板にすぎ、慎重になる必要があるだろう。今後の丹波黒の栽培継続意向としては、「続けたい」という回答がほとんどであったことも忘れてはならない。経済的な意義が小さい場合でも、日々の食事の楽しみや他の人々との交流の道具として丹波黒が生産され続ける可能性はある。

以上を踏まえ、産地形成がなされた農産物在来品種の存続に際しては、今後より多面的な視点から検討することが必要になるだろう。生産の拡大ではなく、継続・存続を検討するフェーズでは、多様な経営の在り方を把握し、それぞれがどのようにその作物を見ているか、その位置づけ・意義づけを構造的に解明し、産地全体のマネジメント方針を複線的な視点で検討してゆく必要があると考える。

## 付記

本稿は、筆者が2016年1月に大阪大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部を大幅に加筆修正したものである。当該修士論文をもとにした論考はすでに雑誌『人文地理』に投稿・掲載済みであるが（小林 2016）、本稿はこの掲載済み論文では紙幅の都合上ほとんど言及できなかった農業集落での調査結果について、新たな視点も取り入れながら報告するものである。

## 謝辞

本調査を行うにあたり、篠山市A・B・C集落の農家の皆様には多大なご負担をおかけしました。その成果を長らく整理・公表できなかった筆者の力不足と怠慢について、深くお詫び申し上げるとともに、筆者の依頼を快く受け入れ、大変積極的にご協力とご支援をいただきましたことに、厚く御礼を申し上げます。

また、大阪大学人文地理学教室の佐藤廉也先生、堤研二先生、波江彰彦先生（現・関西学院大学教育学部）から修士論文を懇切丁寧にご指導いただいたことについて、あらためて感謝申し上げます。

**参考文献**

- 足利幸・内藤重之・小森聡 2007. 「料理店との連携による伝統野菜マーケティングの課題：京の伝統野菜「えびいも」を事例として」. 農業市場研究 16 (1) : 42-50.
- 荒幡克己 2015. 『減反廃止－農政大転換の誤解と真実』, 日本経済新聞出版社.
- 伊賀聖屋 2013. 「食のグローバル化とローカル食料供給体系」. 浅野敏久・中島弘二編『自然の社会地理』: 205-226, 海青社.
- 江頭宏昌編 2016. 『人間と作物：採集から栽培へ』 ドメス出版.
- 加古敏之・羽田幸代・宇野雄一・中塚雅也 2008. 「篠山市における丹波黒産地の形成過程と現段階における課題」. 農林業問題研究 44 (1) : 36-41.
- 金子直樹・河原典史・荒山正彦 2006. 但馬・丹波西部, 金田彰裕・石川義孝編『日本の地誌 8 近畿圏』: 290-302, 朝倉書店.
- 川上幸治郎 1960. 「田作りされる丹波黒ダイズの生産改良の要点」 農業および園芸 35 (10).
- 賀納章雄 2000. 「沖縄県渡名喜島・粟国島における伝統的作物キビの復活とその背景」. 人文地理 52 (1) : 67-83.
- 黒大豆を基軸とする地域産業複合体研究会 2008. 「黒大豆を基軸とした地域産業複合体形成の可能性に関する研究」. 神戸大学大学院農学研究科地域連携センター『平成19年度活動報告書』: 15-32.
- 香坂玲・富吉満之 2015. 『伝統野菜の今：地域の取り組み, 地理的表示の保護と遺伝資源』アサヒビール, 清水弘文堂書房.
- 小林基 2016. 「伝統作物の全国ブランド化－兵庫県篠山市における丹波黒を事例に－」, 人文地理 68 (4), 397-419頁 (DOI : [https://doi.org/10.4200/jjhg.68.4\\_397](https://doi.org/10.4200/jjhg.68.4_397))
- 篠山川沿岸土地改良区設立30周年記念誌編集委員会編 1996. 『篠山川沿岸土地改良事業誌 篠山盆地を拓く』, 篠山川沿岸土地改良区設立30周年記念誌編集委員会.
- 篠山町農業協同組合 1981. 『活力ある篠山町農業をめざして－地域営農振興計画書－』, 篠山町農業協同組合.
- 島原作夫 2013. 「丹波黒大豆の現況と食の歴史1」 豆類時報 (日本豆類協会) 71 : 23-27.
- 島原作夫 2015. 「粒が大きくなかった丹波黒大豆はなぜ大粒化したのか－兵庫県産の丹波黒大豆を事例として－」 豆類時報 (日本豆類協会) 79 : 16-27.
- 私立多紀郡教育会編 1918. 『多紀郡誌』, 辻広三郎.
- 『続 丹波杜氏』 編集委員会編 1995. 『続 丹波杜氏』, 丹波杜氏組合.
- 瀬戸薫 1983. 『篠山町における土地利用と農業振興の取り組み－集落をベースにした土地



利用型-』, 地域社会計画センター.

高橋正郎 2002. 「フードシステム学体系化の課題」, 高橋正郎・斎藤修編『フードシステム学全集 第1巻 フードシステムの理論と体系』: 21-37, 農林統計協会.

高山敏弘 1956. 「溜池地帯における共同田植と水利-兵庫県多紀郡沢田部落における事例的研究-」. 兵庫農科大学紀要(農業経済) 1: 43-73.

タキイ種苗株式会社出版部編 2002. 『都道府県別地方野菜大全』農山漁村文化協会.

西川芳昭 2004. 『作物遺伝資源の農民参加型管理-経済開発から人間開発へ』農山漁村文化協会.

日本の食生活全集兵庫編集委員会編 1992. 『日本の食生活全集 28 聞き書兵庫の食事』: 244-287, 農山漁村文化協会.

兵庫県篠山市編 2000. 『「篠山市」誕生: 篠山町・西紀町・丹南町及び今田町合併の記録』.

兵庫県丹波黒振興協議会編 2014. 『丹波黒大豆物語』, 神戸新聞総合出版センター.

兵庫県農林水産部編 1998. 『丹波黒』, 兵庫県.

山極榮司 2003. 「農業の普及と活動」戦後日本の食料・農業・農村編集委員会編『農学・農業教育・農業普及』農林統計協会.